

あとがき

私たちが歴史編纂の仕事をお引きうけたのは、まだ入社してまもないころのことであった。二人ともワーク・キャンプの経験の後、好善社の群れに加わることになったのであるが、好善社がどのような団体であるかもまだよく知らないとき、おのおのに、「あなたは何かができますか」と問われた。それぞれとまどいをおぼえながらも、好善社に残されている史料整理ぐらいならできらうと思ひ、歴史をまとめる仕事をお手伝いできれば、という意味のことを弱々しく答えたことを思ひ出す。これが好善社の理事会に正式にとりあげられ、一〇〇年史編纂という事業が決定され、のっぴきならないところに立たされることになったのはじめである。

そしてその仕事に取りかかつて、すでに十年余の歳月が流れた。一口に一〇年といつても、そこには、この仕事に関わつた個人の生活史の面でも、また日本や世界の歴史の面でも、かなり大きな変化が含まれている。最初こそまだ時間も充分あると思われ、豊かな生の史料の中に沈潜すること自体は、楽しみですらあつた。しかし、二人の委員で、仕事にいわば二股をかけながら、またいくら小規模な団体とはいへ一〇〇年もの歴史を全く新たにひもとくことは、容易なことではなかつた。(好善社が、なぜ一〇〇年も自らの歴史編纂に具体的には手をつけずに歩み続けてきたかは、興味のある問題である。私たちが最初はやはり不思議に思つたし、少し作業が進むにつれて今度はやや恨めしい気持ちをおいだくようにもなつたけれども、今ではそれなりに理解できるように思う。) しかしこの仕事の重要性は、関わりが深まれば深まるほど痛感されるようになってきた。そこでこの歴

史編纂に専念できずとも、それにできるだけ多くの時間と労力をつぎ込み得るような立場や職業はないものかと、たえず考えつづけた。ここでは省略するが、これが私たちの個人の生活史に、大なり小なり変化をもたらしたことは事実である。しかしそれよりも、こうした変化を生み出したこの仕事の関わる世界の魅力、あるいは迫力こそ、注視すべきものである。その迫力ある世界をどこまで正確に描き出せたか、読者諸賢のご批判を受けなければならぬ。

次にこの書物の中での問題点に二、三触れておきたい。

この書物は、当初好善社の自費出版のつもりで書き始められた。かなり気負いもあったり、しかも二度と出版されない性質のものであるからということ、できるかぎりすべてにわたり充分に書くことを求められた。しかし「序」にあるようないきさつと、この分野はけっして特殊なものではない。したがって多くの読者に読んでいただきたい、との判断もあって、出版は日本基督教団出版局におまかせすることになった。そこで今度は、できるだけ読みやすい読物にするという要求が生じ、大幅な書き換えが求められた。この間に特に理事関根文之助先生の御助言・御指導をしばしば受けた。それでもできあがった本書には、まだ生硬な表現や生の史料がかなり多く残っていて、かならずしも読みやすくなったとはいえない。その責任はもちろん歴史編纂委員が負うべきものであるが、一言弁明を許していただくならば、私たちは、できるかぎり生の史料を多くして、それをもとに筆者と読者とが共に考えることができ、という考え方を捨てることができなかつた。換言すれば、多くの知識をすでに持つ者が、無知な者に教えをたれる、という意味での「啓蒙」の考え方を捨てたいと思つたのである。そして生の史料を多くしたところ、紙数の関係もあって、説明の文を簡潔にしなければならず、その結果、舌足らずの文になったり、また全体が読みにくくなつたりした。また時代が現在に近づくにつれ「生ぐさい問題」も多く

なる。藤原理事長は、「できるだけあるがままに」書くように励ましてくださったのであるが、どうしても「現在」に束縛されて書くことができない、あるいは逆に書き過ぎている点もままあると思う。

今一つ、この書物の中で用いた表現で、「らい」という呼称や「救らい」という言葉について、私たちの確認しているところを述べておこう。

「らい」あるいは「癩病」には、「ハンセン氏病」というもう一つの呼称がある。昭和二十七年ごろより、国立らい療養所の患者自治会が中心になって展開した、らい予防法改正運動のなかに、「病名・呼称を変えよう」という運動があった。「らい」という言葉には古い、忌まわしい因襲的な観念がまつわりついている。この用語が使われるかぎり社会から偏見をなくすることは至難だと考えたからである」と『全患協運動史』はその理由を述べている。そして、らい菌の発見者であるノルウェーの医学者アルマウエル・ハンセンにちなんで、「ハンセン氏病」とするよう一般にも政府にも改称を要請した。医学用語としては認められなかったが、新聞や雑誌ではほとんどこの呼称が用いられ、社会的には定着している、と前出の文献は説明している。ところが好善社は、その広報誌やこの書物においても依然として「らい」という呼び方をしている。

その理由の第一は、私たちは「らい」を「ハンセン氏病」と呼び変えても、なんら「らい」そのものの正しい理解とはならないと考えるからである。たしかに「ライ」という言葉には、有史以来、天刑病、遺伝病、不治の病、恐ろしい伝染病、そして変形した肉體、汚らわしい病氣というイメージがついてまわる。しかし、近代の医学は、慢性の伝染病であるが、不治ではない、早期発見、早期治療により、治癒することを明らかにしている。かつて結核が同じように恐れられたが、今は「結核」という呼び名のままで、正しい理解がなされている。らいも「らい」と呼ばれながら、正しい理解のされるときがくる。「ハンセン氏病」と呼び変え、問題の所在をすり

かえてしまふのではなく、「らしい」を「らしい」として正しく理解されるように、今後も努力を続けたいと願っている。

今「問題の所在」と言ったが、第二の理由はそのことに関わっている。らしいを理解しようとするとき、私たちはその歴史のなかで偏見や差別を勝手につくりあげてきたという、「社会病」としての側面を見のがすわけにはいかない。こわいもの、汚いものというイメージを付与して、私たちはらしいを病む人たちを家族や社会から切り離してきた。彼らにとっては、耐え難いことでありながら、耐えることを強制してきた。第二次世界大戦後の人権復権の潮流のなかで、せめて呼称を変えてでも、自分たちに向けられた偏見と差別にたたかいていどまなければならなかったのである。その苦悩と努力は、私たちの想像をはるかに越えたものであったろう。問題を私たちの側に移すならば、かつて「らしい」という病にかかったが故に、「らしい者」（この病気にかかった者だけをこのように呼ぶ。これが不当なことは、「チフス者」「コレラ者」などと呼ばないことを考えただけでも分かる）の烙印を押し、社会から切り捨ててきたことを、私たちの罪として告白しなければならぬ。したがって、問題の本質は「あなたと私」という、対等な関係に回復させることにあるのであって、「らしい」という呼称に込められたと同じ意識をもって「ハンセン氏病」と呼び変えてみても、それはなんら免罪符を得ることはならない。それどころか、問題の巧みな隠蔽につながる危険を感じずにはおられない。

こうして、歴史的に回顧し、その本質をつきつめてみると、「救らしい」は、健康者の勝手な言葉だ。

好善社が、彼らとの関わりを通して、気づかされてきたことは、彼らが私たちの憐れみを受けるために生きているのではない。病気や偏見とたたかいたがながらも、人間として生きようとし、現に生きている、その事実である。例えば、私たちと最も近い関係にある療養所のキリスト者を取りあげてみるなら、その人たちの証言する自ら

の受けた神の恵みのかずかずは、私たちの信仰を根底から揺り動かしてやまない。この事実を見すえるとき、もはや彼らは「救らい」の対象としては存在しない。したがって、私たちが療養所に出かけていくのは、人間として生きる喜びを、共に分かちあいたいと思うからである。教会の場合は、神より分かち与えられた彼らの賜物に、私たちが共にあずかるためなのである。

また、私たちがこの書物を書く仕事を通じて確認したことは、まさにこういふ歪んだ人間関係を、正常なものにすることが必要だ、ということであり、好善社が創立以来続けてきた伝道と奉仕のわざも、内容的には、この歪んだ関係を生み出した、内なる露骨な醜さと取り組む、ということである。それはすでに先輩の働き人たちが身をもって示していたことで、らいを病んだが故に偏見や差別に苦しみ、絶望の淵に涙した人たちの苦難にあずかることでもある。なぜなら、その苦難は、すでに主イエス・キリストが先立って引き受けてくださった、という保証があるからである。私たちは、ただその後を追って歩みさえすればよいのである。

私たちが委員の力量不足から、書きもらしたことが多々あることをお詫びしなければならぬ。なかでも、好善社が特に意を用いてきた療養所の諸教会の歩みを並記できなかったことは残念である。また好善社の群れのひとりひとりについても、スポット・ライトをあててみたかったが、それも思うにまかせなかった。繰り言はこれぐらいいにして、今は、日本のらしい事業史のなかに埋もれている貴重な信仰の証しを発掘し、世に問う事にたずさわる人の与えられることを祈念しつつ、またその一例として、本書ができるかぎり多くの人に読まれることを願いつつ、私たちの仕事を終えることにしたい。

終わりに、読者の皆様に対しお願いしたいことは、御覧のように多くの不足や問題点を持つ本書を読み通して

いただきたいということ、できれば様々の御批判、御教示を与えていただきたいということである。

一九七八年一月三十一日

長尾文雄
棟居 洋

参考・引用文献

一般および日本キリスト教史関係

田村直臣著『信仰五十年』(大正十三年、警醒社刊)

内務省社会局編『大正震災志』上・下(大正十五年、内務省社会局刊)

山本秀燐著『日本基督教史』(昭和四年、日本基督教會事務所刊)

山本秀燐著『日本基督新栄教会六十年史』(昭和八年、新栄教会刊)

『養育院六十年史』(昭和八年、東京市養育院刊)

村上三朗編『目黒区大観』(昭和十年、目黒区大観刊行会刊)

平塚益徳著『日本基督教主義教育文化史』(昭和十二年、日独書院刊)

佐波巨編『植村正久と其の時代』(昭和二十一年、教文館刊)

田村光編『女子学院八十年史』(昭和二十六年、女子学院刊)

久山康編『近代日本とキリスト教—明治編』『同—大正・昭和編』(昭和三十一年、創文社刊)

海老沢亮著『日本キリスト教百年史』(昭和三十四年、日本基督教団出版局刊)

小澤三郎著『日本プロテスタント史研究』(昭和三十九年、東海大学出版会刊)

『キリスト教大事典』(昭和三十八年、教文館刊)

都田恒太郎著『日本キリスト教合同史稿』(昭和四十二年、教文館刊)

『明治学院九十年史』(昭和四十二年、明治学院刊)

『近代日本総合年表』(昭和四十三年、岩波書店刊)

手塚竜磨著『英学史の周辺』(昭和四十三年、吾妻書房刊)

『井深梶之助とその時代』第一—三卷(昭和四十四年、明治学院刊)

- 海老澤有道・大内三郎共著『日本キリスト教史』（昭和四十五年、日本基督教団出版局刊）
- 本田清一編『百年の恵み―日本基督教団新栄教会史』（昭和四十八年、日本基督教団新栄教会刊）
- 海老澤有道編『立教学院百年史』（昭和四十九年、立教学院刊）
- 『日本聖書協会一〇〇年史』（昭和五十年、日本聖書協会刊）
- 日黒区立油面小学校編「創立五〇周年記念『油面』」（昭和五十年刊）
- 手塚竜磨著『日本近代化の先駆者たち』（昭和五十年、吾妻書房刊）
- フェリス女学院資料整備委員会編訳『キダー書簡集・明治初期女子教育と宣教の記録』（昭和五十年刊）
- 『女子学院百年の歩み（年表）』（昭和五十年、女子学院刊）
- 明治学院百年史委員会編『明治学院百年史資料集』第一―六集（昭和五十一―五十二年）
- クララ・ホイットニー著、一又民子訳『クララの明治日記』上・下（昭和五十一年、講談社刊）
- 『明治学院百年史』（昭和五十二年、明治学院刊）
- 『キリスト教年鑑』昭和五十二年版（昭和五十二年、キリスト新聞社刊）
- 「七一雑報」（明治八―十九年、新報社刊）
- 「福音新報」（明治二十四―四十五年）
- 「社会事業」（昭和四―十九年、中央社会事業協会刊）
- 「社会福利」（昭和五年、東京府社会事業協会刊）
- 「東京日日新聞」（昭和十三年九月十五日朝刊）
- 「朝日新聞」（昭和十四年六月十二日夕刊）
- 「白金通信」第五六号（昭和四十八年、明治学院大学広報室刊）

ライ事業関係

米沢三三著「Olimans, A」〔『思齋』特輯号、昭和五年、全生病院秋津教会刊〕

- 生江孝之著『日本基督教社会事業史』(昭和六年、教文館刊)
- 東京同愛盲学校編『和田秀豊略歴』(昭和八年刊)
- 岩下壮一著『救癩五十年苦闘史』(昭和十四年、カトリック中央出版部「声」第七六〇—七六三号別刷)
- ジャン・アレクシス・シャンボン著、岩下壮一訳『救癩五十年苦闘史(統)』(昭和十四年、藤楓協会刊)
- 横田久・藤原鉤次郎他談『癩療養所懐古座談会(速記録)』(昭和十五年、関西救癩協会刊)
- 光田健輔著『回春病室—救ライ五十年の記録』(昭和三十五年、朝日新聞社刊)
- らい文獻目録編集委員会編『らい文獻目録(社会編)』『同(医学編)』(昭和三十二年、長島愛生園刊)
- 藤楓協会編『光田健輔と日本のらい予防事業—らい予防法五十年記念』(昭和三十三年刊)
- 国立療養所多磨全生園編『創立五〇周年記念誌』(昭和三十四年刊)
- 国立療養所長島愛生園編『長島愛生園三〇年の歩み』(昭和三十五年刊)
- 原田季夫著『文化と福音』(昭和三十五年刊)
- 長尾文雄・辻井正・市川悟編『忘れられた島—ライとたたかう人々』(昭和三十七年、関西学院大学宗教総部刊)
- 森幹郎著『足跡は消えても—人物日本ライ小史』(昭和三十八年、キリスト新聞社刊)
- 青木恵哉著『選ばれた島』(昭和三十八年、沖繩聖公会本部刊)
- 二宮矩明編『全国ライ療養所・キリスト教会代表者会議 一九六二』(昭和三十八年、長島曙教会刊)
- 『沖繩救らいの歩み』(昭和三十八年、沖繩らい予防協会刊)
- 上原信雄編『沖繩救癩史』(昭和三十九年、沖繩らい予防協会刊)
- A. Donald Miller, *An Inn Called Welcome—The Story of the Mission to Lepers, 1874—1917 1965*. ©The Mission to Lepers
- 林芳信著『回顧五十年』(昭和四十一—四十二年、「多磨」第四六卷第七号—第四八卷第一二号の抜刷別冊)
- 林緑峯編『献堂記念文集』(昭和四十一年、奄美和光園谷川集會刊)
- 堤良三編『第二回全国ライ療養所・キリスト教会代表者会議—一九六四』(昭和四十一年、光明園家族教会刊)
- 渡辺信夫著『ライ園留学記』(昭和四十三年、教文館刊)
- 同著『沖繩ライ園留学記』(昭和四十五年、教文館刊)

『第三回全国らい療養所・キリスト教会代表者会議―一九七二』(昭和四十六年、星塚敬愛園厚生会刊)
山本与志朗・加藤三郎共著『御座の湯口碑』(昭和四十七年、御座の湯口碑刊行協力委員会刊)

『開園三十五周年記念誌』(昭和四十八年、国立療養所沖繩愛楽園刊)

桜井方策編『救癩の父 光田健輔の思い出』(昭和四十九年、ルガール社刊)

国立療養所史研究会編『国立療養所史(らい編)』(昭和五十年、厚生問題研究会刊)

駿河会(患者自治会)編『入所者三十年の歩み』(昭和五十年、国立駿河療養所患者自治会刊)

内田守編『リデルとライトの生涯―ニカリの実るを待ちて』(昭和五十一年、リデル・ライト記念会老人ホーム刊)

国立療養所菊池恵楓園自治会編『自治会五〇年史』(昭和五十一年)

全国ハンセン氏病患者協議会編『全患協運動史―ハンセン氏病患者の闘いの記録』(昭和五十二年)

大塚かね談・宮川量筆記「不滅の栄光―慰癩園 建設前十ヶ年苦心秘話」『愛生』第五卷第五号(昭和十年五月、長島愛生園慰安会刊)

和田秀豊「救癩四十五年」『医事公論』第一三八一号(昭和十四年一月)

光田健輔「慰癩園五十年」『愛生』第一二卷第九号(昭和十七年九月)

藤原鉤次郎「私立慰癩園閉止迄の概略」『愛生』第一二卷第一〇号(昭和十七年十月)

「全患協ニュース」(全国ハンセン氏病患者協議会刊)

井上謙「癩予防方策の変遷」『愛生』第九卷第一〇号―第一〇卷第七号(昭和三十年九月―三十年七月)

神村正史編『ワークキャンプ記念文集』(昭和四十年、神山教会刊)

藤原偉作「九年間を回顧して」『共助』通巻第二〇〇号(昭和四十二年六月、共助会刊)

「愛生」通巻三三四号(昭和四十二年七月)

「甲田の裾」通巻三九〇号(昭和四十六年十一月、松丘保養園慰安会刊)

馬場省二「ライは消えず―沖繩宮古本島におけるライの現状」『医事新報』通巻二五五七号(昭和四十八年四月)

「甲田の裾」通巻四〇六号(昭和四十八年十二月)

「あだんの実」第一六六号（昭和四十九年七月、沖繩らい子防協会事務局刊）

「甲田の裾」通巻四一四号（昭和四十九年十一月）

藤原偉作「らい事業とわたし」「立教」第一五号（昭和四十九年十二月、立教大学刊）

「菊池野」通巻二四八号（昭和四十九年十二月、菊池恵楓園自治会刊）

藤原偉作「共に歩んだ六年」「いずみ」故使徒ヨハネ渡辺靖二郎追悼号（昭和五十年六月、多磨全生園カトリック愛徳会刊）

「菊池野」通巻二五九号（昭和五十年十二月）

松本馨「自由か奴隷か」「多磨」第五七卷第九号（昭和五十一年九月、多磨出版部刊）

好善社資料

△出版物▽

藤原鈎次郎編「慰廃園略沿革―献堂式創立滿三十五年記念」（昭和四年十一月刊）

「創立記念 慰廃園感謝号」（昭和四年刊）

『慰廃園』写真集（昭和九年刊）

「慰廃園記念遺跡地完成にあたり」（昭和三十三年十一月刊）

広報誌「ライ園のキリスト者」第一―一九号（昭和三十六年十二月創刊 年一回）

同誌改称「ある群像」第二〇―三三三号（昭和四十六年五月―五十二年十一月）

「ある群像」別冊第一号「第一回学生キリスト者ワーク・キャンプより」（昭和三十九年三月）

同第二号「宮古島とらい」（昭和五十年二月）

同第三号「一九七六年度ワークキャンプ感想文集」（昭和五十一年十一月）

同第四号「一九七七年度ワークキャンプ感想文集」（昭和五十二年十一月）

「らい園教会新聞」第一―五六号（昭和三十七年十一月創刊）

「全国学生・社会人キリスト者ワーク・キャンプ参加者感想文集」（昭和四十二、四十三、四十四、四十七、五十各年度版）

「南静園訪問記」(昭和五十二年)

△主な記録▽

「好善社記録」明治十年より

「ヤングマンの手紙」

「大塚正心日記」明治二十七年より

「大塚正心に関する村上恭次郎の手記」(昭和十年)

「藤原鉤次郎日記」(大正十四年―昭和三十一年)

「好善社事業報告」

「好善社公文書綴」

「オルトマンズの手紙」

「英国救らい協会の手紙」

「米国救らい協会の手紙」

ある群像——好善社100年の歩み

1978年5月20日 初版発行

© 好善社 1978

著 者 好 善 社

発行所 日本基督教団出版局

〒160 東京都新宿区西早稲田2丁目3の18
振替 東京 8-145610 電話(204) 0421 (代)

印刷 松濤印刷 ケース印刷 伊坂美術印刷 製本 市村製本所

0016-220193-6100 (日キ販)